

地域資料デジタル化の課題と解決に向けた方策

前川 道博*¹

<概要>デジタルアーカイブの大きな課題の一つは地域資料のデジタル化が極度に立ち遅れていることである。DXが進む現代においては資料のデジタル化により誰もが地域の情報源に直に触れ、主体的に地域を学び・理解に踏み出すことのできる社会の実現が望まれる。本研究では、地域資料のデジタル化を提起すると共に、地域資料のデジタル化が担えるデジタルアーキビストの養成を地域人材のリスク/リカレント教育の観点から具体的にどのように養成講座としてモデル化できるか、諸課題の解決が図れるかを課題提起する。

<キーワード>地域資料, デジタルアーカイブ, デジタルアーキビスト, 人材育成, DX

1. はじめに

地域社会におけるデジタルアーカイブの大きな課題の一つは地域資料のデジタル化が極度に立ち遅れていることである。全国民が日常生活において例外なしにパソコンやスマートフォンなどデジタル機器を日常的に使うようになり、情報化の立ち遅れていた学校においてもGIGAスクール政策により児童生徒が1人1台タブレットPCを使える学び環境が実現した。その一方で、地元を知ろうと思うとネット上には地元を知る資料がほとんどないことに気づく。

その要因には、地域資料の多くがデジタル化されていないこと、地域住民の多くがデジタル化資料の必要性を感じていないこと、一次資料から地域を探る学習文化が育っていないことなどが挙げられる。これらは社会の急速なデジタル化に伴う社会構造を背景とした「アナログレジーム問題」「地域資料埋もれ問題」（いずれも後述）が顕在化した状況と総括できる。

本研究では、具体的に何をすれば地域資料のデジタル化は進むのか、地域の人々が地元地域を遍く学べる社会に変われるのか、以上の課題認識からその具体的で実践的支援となる「藤本蚕業歴史館で学ぶデジタルアーキビスト養成リスク/リカレント講座」[1]を企画した。当該講座は全国どこでも実践が可能な地域社会におけるDX実現のモデル講座となることをねらいとしている。

本研究では、地域資料のデジタル化が図れるデジタルアーキビストの養成を地域人材のリスク/リカレント教育の観点から具体的にどのように課題解決が図れるか、地域資料のデジタル化により、誰もが地域の情報源に直に触れ、主体的に地域を学び・理解に踏み出すことのできる社会に変革できる段階へと後押しで

きるかを考察する。

2. 地域資料デジタル化の課題

(1) アナログレジーム問題

地域資料のデジタル化が著しく立ち遅れている状況の背景に、旧来の知識消費型社会に慣れ親しんだ多くの人々が旧来のシステム、慣習から抜け出せない意識の壁がある。書籍や放送などのマスコミュニケーション型媒体、学校における画一的教育、紙媒体をアウトプットとする慣習などである。コンピュータを使ってもその弊害がある。表計算ソフトを使いながら、その目的は統計表を印刷するための版下作成にしか使っていないケースなど、類似のケースは枚挙に暇がない。社会の進化の足枷となる制度や慣習などを変えられない壁、変えることの必要性に気づけない認識の壁をここでは「アナログレジーム」問題と呼ぶことにする[2]。

社会のDX(Digital Transformation)化は内閣府が「Society5.0」とも謳っているように人々が遍く知的で満足度の高い生活を営める社会へと進化することである[3]。その要点はDXの実現のために特別な情報化政策を行うことでは必ずしもない。私たちの日常を意識改革、発想の転換で「ちょっと変える」ことが社会をDXに導く具体的なトリガーとなる。まだデジタル化されていない地域資料の存在に気づき、そのデジタル化を図れる人材が各地域に増えることが期待される方向である。

(2) 地域資料埋もれ問題

生涯(自己)学習、学校教育、地域活動などの中で地元について調べようとするに役立つ資料が極めて少ない現実に直面する。地域の知識・ファクトの源泉となる一次資料は文書館や役所内などに保管されてはいるものの殆どの人はその存在すら知らず、ましてアクセスしよ

*¹Michihiro, Maekawa : 長野大学 e-mail= maekawa@nagano.ac.jp

うと発想することすらない。しかし地元資料の多くは例えば公民館の片隅の書架に置いてあったり、学校の資料室や校長室のロッカーの中に積んであったりする。個人宅の資料は誰も認知していないので、ご当主が亡くなると共に物も処分され、地域の貴重な情報源が永久に失われることはごく普通に全国のここかしこで起きている。

(3) 人材育成の課題

デジタルアーカイブの活動には、デジタルアーカイブを利用した活動の実践、デジタルアーカイブの計画・構築の両面が考えられる。

これからデジタルアーカイブの取り組みを始めるそれぞれの学習者は、その職業や主たる活動にデジタルアーカイブ対応の新たなスキルを獲得するリスキル学習、リカレント学習（学び直し）と位置付けることができる。

本研究は、こうした各地域の課題解決につなげる一助として、地元根拠したデジタルアーカイブ養成講座を開くことを提案するものである。その具体的実践として、長野県上田市にある民間の文書館「藤本蚕業歴史館」[4]をフィールドとする講座を開講する。そのねらいと実施案についても紹介することとしたい。

3. 藤本蚕業歴史館ケース分析

(1) 藤本蚕業資料の整理・保全

藤本蚕業歴史館は2009年、長野県上田市にある藤本工業株式会社（前身は藤本蚕業）が創設した民間主体の文書館である。展示機能も持つ施設のため「歴史館」のネーミングとした。江戸期から現在の上田市上塩尻で蚕種製造業を営んだ上塩尻村の旧佐藤宗家（当主は藤本善右衛門を世襲）は明治期に企業組織「藤本蚕業」に発展した。同館は旧佐藤宗家所蔵の資料（史料）、企業化後の藤本蚕業の資料を所蔵している。藤本工業は上田小県近現代史研究会の協力により2004年頃から数年かけて1万点を超える膨大な資料を分類整理し、目録作成、文書の分類収蔵、道具類の展示がなされた[5]。

(2) 資料のデジタル化への着手

2022年度、長野大学前川道博研究室、同ゼミ、地元有志で構成する藤本蚕業プロジェクト[6]により同館所蔵資料のデジタル化の取り組みが始められた。収蔵資料は社内文書が約5,000点、図書（書籍雑誌等）が約5,000点である。その他、江戸期以来の旧佐藤宗家文書が大量に保全されている。2022年度は目録をデジタル化

すると共に社内文書、図書の一部をデジタル化し、具体的にどのように地域資料がデジタル化されるかを検証しながら実践している。

(3) 活用されないアーカイブス課題

地域資料のデジタルアーカイブ化に対して、社会でデジタル化資料の活用が殆どされないことの課題が常に指摘される。デジタルアーカイブは膨大な資料が学習者側の関心に対応し、参照したい資料があるかどうか活用の前に問われる課題である。社会全体から見れば特定の地域社会における地域資料のニーズは殆ど存在しないと言ってよい。デジタルアーカイブは、アクセスの多いものが必要なのではなく、逆にアクセス頻度の極めて少ない資料、あるいは全くアクセスされることのない資料にもアクセスできる可能性が開かれていることにデジタルアーカイブの存在意義がある。ロングテールモデルになぞらえると、デジタルアーカイブの資料はアクセス頻度は少なくとも数多く存在していなければならないロングテールである。

(4) 藤本蚕業歴史館所蔵資料の可能性

藤本蚕業歴史館所蔵資料は、藤本蚕業の本業であった蚕種製造業の社内文書である。これほど豊富に近代の蚕種製造企業の一次資料が保全されているケースは、全国で唯一と思われる。同館には、文書だけでなく、図書（書籍・雑誌等）が多数収蔵されている。これらは蚕糸業、蚕種製造業に関するもの以外に歴史書、経済、文学など多様な図書であるところに特色がある。社屋等に残っていたあらゆる資料の「悉皆」であると言えよう。

これらの文書、図書に共通する特性は極めて年代が古いことである。本来著作物であった図書も著作権法で規定された保護期間である70年を優に超えたものが多い。著作者の死後70年を経過したものも多い。つまりこれらの図書の多くはパブリックドメインとしての公開が可能なのである。

資料の整理を主導した研究者の一人、新津新生氏は次のように述べている。

「捨てたり、壊したりすればゴミであり、産業廃棄物ですが、遺せばお宝になります。従って、これからの上田市民の課題は、これら蚕都上田のお宝を保存し、活用する方法を研究して、より多くの市民にその意味と価値を伝えて行くことだと考えます。」[7]

これらの資料がどのような価値を持つのか、

活用できるのかは未知数である。藤本蚕業歴史館が創設される以前、幸いにも藤本工業社屋に遺されていた単なるゴミとしての資料群がタイムカプセルから宝の山のごとくに取り出された状態にあるとも言える。

こうした未整理、未調査の一次資料にどのような価値があるのか、そこから何が探求できるのか、地元を向けた時にどのような資料が発見されずに眠っているのかなど、地域資料のデジタルアーカイブを考える上では参考に資するところの多い資料群と言えよう。

4. 地域資料デジタル化の解決に向けた方策

(1) 分散型で誰もが主体的に利用できる参加可能型プラットフォームによる支援

藤本蚕業歴史館所蔵資料のデジタルアーカイブ化に向けては、藤本蚕業プロジェクトでいくつかの観点から課題解決に向けた試行的な取り組みを行っている。

一つ目の取り組みは分散型で誰もが参加可能な平易なプラットフォーム提供による支援である。デジタルコモンズクラウドサービスd-commons.net[8]を使い、デジタルアーカイブ構築運営のためのサイト『藤本蚕業アーカイブ』の構築を進めている[9]。

二つ目の取り組みは学習者中心でデジタルアーカイブの活用、構築が共に行える学習の「キュレーションモデル」の提唱である[10]。

(2) 『藤本蚕業アーカイブ』のデザイン

サイト構築においては、以下の観点から誰もがデジタルアーカイブ構築や利用に踏み出しやすいアーカイブサイトの構築を目指している。

第1は、デジタルアーカイブデータ作成・サイト構築の省力化・自動化の援用である。通常、デジタルアーカイブ構築には専門業者等へのアウトソーシングが行われるケースが多い。こうしたアーカイブ構築は事業経費がかかるだけでなく、自分たちが抱えている課題の共有やその解決策を自らの意思で導出しにくい問題がある。

第2はデジタルアーカイブサイトを従来以上に受け手側の興味関心を引き出すような知識誘発(knowledge navigation)な情報空間にするにはどうすればよいかという課題である。この観点からは、サイトのユーザインタフェースをネット上に藤本蚕業歴史館のリアル空間があたかもそこにあるかのように可視化され

アクセスできるバーチャルな情報空間とすることである。そのため、本サイト構築では藤本蚕業歴史館のデジタルツインとなる仮想的な情報空間を構築することとした。

第3は、デジタルアーカイブサイトを提供する/受容するというものではなく、学習者が共にアーカイブ構築に参加したり、自らのキュレーション学習成果を公表したり、といったように知識循環が支援されるサービスとして運営していく方策である。

5. デジタルアーキビスト養成講座の実施計画

(1) 講座のねらい

地域資源のデジタルアーカイブ化とその活用を図ることができる人材育成をねらいとし、講座を実施する[1]。教員・文化施設職員などにとってはリスキル(スキル・知識の新たな獲得)、リタイアされた方々にとってはリカレント(学び直し)な学習機会となる。

藤本蚕業歴史館(長野県上田市)を直接的な対象とするが、デジタル化資料の利用、オンライン形式の講座形態により、全国から興味・関心のある方々が受講できるよう全国に開かれた講座として実施する。また事後も講座参照が可能なよう、講座記録事態をオンデマンド配信するデジタルアーカイブとする。

(2) 講座構成

★実践講座1:地域資料活用によるキュレーション講座

デジタル化した地域資料を参照してどのように地域探求が進められるかを藤本蚕業歴史館をフィールドに学ぶ。学習者主体のキュレーション型学習を始める学習機会とする。

【日程とプログラム】

①12月10日(土) 10:00~16:00 藤本蚕業歴史館に学ぶ地域アーカイブの活用

②12月17日(土) 10:00~16:00 藤本蚕業所蔵資料で近現代のキュレーション

③1月14日(土) 13:00~16:00 皆さんのキュレーション披露会

★実践講座2:地域資料のデジタルアーカイブ化講座

地域の一次資料をどうするとデジタルアーカイブ化ができるかを藤本蚕業歴史館をモデルケースに学ぶ。博物館・図書館・文書館・学校・大学・企業・地域コミュニティ等において資料等のデジタル化をこれからの地域づくり、地域学習にどう活かすことができるかを学習

する。

【日程とプログラム】

① 2月4日(土) 10:00~16:00 藤本蚕業歴史館に学ぶ地域アーカイブの課題

② 2月5日(日) 10:00~16:00 地域資料デジタルアーカイブの構築に向けて

③ 2月18日(土) 13:00~16:00 皆さんのデジタルアーカイブ/地域学習企画披露会

(3) 学習支援メディア環境

デジタルコモンズサイト『藤本蚕業アーカイブ』をd-commons.netにより開設し、今後に向けた持続的なデジタルアーカイブ構築・運営のサービスとして提供する。このサービスを共有地として、地元藤本蚕業歴史館の所蔵資料のデジタル化、地域活動、学校の地域学習などと結びつけたデジタルな地域社会(デジタルコモンズ)の実現を目指すとともに、全国から学びあえるオープンなデジタルコモンズのプラットフォームとしていく。

6. 今後に向けて

地域活動・資料のデジタルアーカイブ化は弱小な体制で行われることが多く、永続的な保全、利用者数の拡大といった面での課題を例外なしに抱えている。この課題に 대응するため、そのone of themでもある本アーカイブサイト『藤本蚕業アーカイブ』と当該講座がどの地域においても参考となるモデル的实践となることを期待したい。

本研究では、地域資料のデジタルアーカイブ化に踏み出すためのアーカイブ構築と人材育成に主眼を置いた。さらなる課題としては、構築したデジタルアーカイブを永続的に残すことをどう保障・支援するか、デジタルアーカイブの各地域のアグリゲーターとなる機関のデジタルアーカイブサイトとの連結、また全国デジタルアーカイブのプラットフォームである「ジャパンサーチ」等と連結させる課題がある。

特に地域の群小なデジタルアーカイブサイトが消失したり、存在が認知されないなどの支援は地域DXの解決すべき課題である。

これらの課題については今後の研究において実践的に解決の方向を導出したいと考えている。

また当該講座の開催を機に課題を抱える全国各地の方々とも連携・推進が図れるように

するためのネットワーク「全国コミュニティアーカイブ連絡協議会」(仮称)の立ち上げが望まれる。

参考文献

[1]「藤本蚕業歴史館で学ぶデジタルアーキビスト養成リスキル/リカレント講座」概要(2022)

<https://d-commons.net/uedagaku/?c=&p=11252>
(参照 2022-11-08)

[2]前川道博(2022)、デジタルコモンズが拓く地域資料のデジタルアーカイブ化、<https://d-commons.net/uedagaku/dcommons1?c=&p=8719>

(参照 2022-11-08)

[3]内閣府、Society5.0、

https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/

(参照 2022-11-08)

[4]藤本蚕業歴史館 2009年10月開館、藤本工業が開設(所在地:長野県上田市上塩尻248)

[5]藤本工業株式会社(2009)、藤本蚕業歴史館所蔵史料目録

[6]藤本蚕業プロジェクト(2022)、藤本蚕業プロジェクト事業計画資料

<https://www.mmdb.net/fujimoto/project/2022-0628.pdf>(参照 2022-11-08)

[7]新津新生(2009)、蚕都上田を未来に遺そう

<https://www.mmdb.net/fujimoto/2009-1122niitsu.pdf>(参照 2022-11-08)

[8]前川道博(2022)、分散型地域デジタルコモンズ d-commons.net の開発、<https://d-commons.net/uedagaku/dcommons1?c=&p=8720>

(参照 2022-11-08)

[9]『藤本蚕業アーカイブ』は2022/12/10公開予定。別サイト『藤本蚕業デジタル資料館』(<https://d-commons.net/fujimoto/>)は公開。

(参照 2022-11-08)

[10]前川道博(2021)、キュレーションモデルによる地域資料のデジタルアーカイブ化: MALUI連携に向けた学習者中心のアプローチ、

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsda/5/s1/5_s17/_article/-char/ja

(参照 2022-11-08)